

過去に生きるのではない。  
未来に生きるのだ。

### 『過去のない男』

2002年 フィンランド映画 97分

監督/アキ・カウリスマキ

主演/カティ・オウティネン、

マルッキ・ベルトラ



記憶を喪失した男の再生物語である。

暴漢に襲われ、めった打ちにされて瀕死の重傷を負う。カネも身分証も盗られ名前まで覚えていない。ヘルシンキの港近くでコンテナに住むホームレスたちに助けられる。所有するものがない共通点のゆえに、彼らは主人公を受け入れる。ぶっきらぼうではあるが親切なのである。

「ディナーに行こう」と誘われていくと「救世軍」が無料で給食を提供してくれる。一人でレストランに入り、お湯だけならタダということで、使い古したティーバッグをおもむろに懐から出したりする。微笑ましくも巧まざる笑いが生まれる。

登場人物がぶっきらぼうだが、映画技法も同様である。カメラはほとんど動かず、底辺の人々の生活を説明ぬきに見つめていく。無機質とも言える冷たい感触に思えた画面が次第に温かみを帯びてくるから不思議だ。リアルに現実を見つめつつも、下層の人々への作者の愛情がにじむ。そう、人間讃歌になり得ていると言ってよい。

この救世軍が主人公の転機になる。そこに勤める中年女性イルマと、いつしか心を通じ合わせていく。だが、記憶を失う前に巻き込まれた事件で尋ね人として写真が新聞に出たことから、妻がいることがわかり、男は家に帰らねばならなくなる。イルマと別れなければならない。中年になってはじめて愛を知ったイルマは悲しく寂しい。

妻のもとに帰ることになった男が、戸惑いつつ呆然とコンテナの前で佇む。イルマが駆けつけてくる。作中、たった一カ所、静かな激情が走るシーン、いや、ただワンカットだけである。ここも無技巧である。画面中央にいる男に向かってイルマが画面の外から男に抱きついていく。二人

の表情をアップにするでもなく、カメラはほんの少し二人に近づいていくだけだが、イルマの気持ちがそくそくと伝わってくる。美しいラブシーンになっている。

家に帰ってみると妻には新しい恋人がおり、離婚を望んでいた。男は救世軍に戻ってイルマと新しい人生を歩みだすことになる。ラストシーン、二人にもう言葉はいらない。夜の街を手をつないで画面の奥にある家に帰っていく。鉄道線路を渡ると、直後に貨物列車が画面を横切っていく、二人の姿は影に隠れて見えなくなる。線路と列車で隔てられることが、今までの世界とこれからの生活の区切りを表している。線路の向こうにはささやかな希望が開けることを暗示する。映像ならではの優れた表現である。画面は静止したままで、まさに無技巧の技巧であるが、作者の深い思いがさりげなく、しかし確実に見る者の胸に迫る。

男が列車の食堂で寿司を箸で食べ、日本酒を燗とつくりで飲むシーンがある。バックにはクレイジーケンバンドの「ハワイの夜」が流れる。遠く北欧の監督アキ・カウリスマキは、この映画でカンヌ映画祭のグランプリをとっている巨匠だが、彼がもっとも敬愛するのが小津安二郎である。動きの少ない画面などに見るユニークなスタイル、さりげないユーモアや、日常を見つめる透徹した目など、確かにどこかで小津を感じることができる。

#### プロフィール

吉村 英夫 (よしむら ひでお)

1940年生まれ。映画評論家、愛知淑徳大学教授。早稲田大学卒業後、三重県立高等学校で教鞭を執る。34年の教員生活を経て退職、現在に至る。著書に『完全版男はつらいよの世界』『老いてこそわかる映画』などがある。近刊に『吉村英夫講義録 チャップリンを観る—そして「ローマの休日」へ』